

# 高野山親王院聖教文書調査概要

— 付、資料紹介 『道範日課臨終秘儀』 —

## 密教文化研究所聖教文書調査班

### 1、親王院聖教文書調査実施の経緯

平成四年二月十二日夜の総持院火災により、隣寺親王院では類焼を恐れて什物・聖教等を分散避難したが、蔵から出してあった聖教は元の所属が分からなくなり、一部紛失の危惧があったため、翌五年七月頃、密教文化研究所に対し非公式ではあるが、住職安田弘仁師より聖教の整理をかねて調査の依頼があった。当時、研究所としては『定本弘法大師全集』完結を目指して人的に余裕がなく、そのままになっていた。その後も親王院での状況は変わっておらず、住職も調査・整理の意志をお持ちであるため、平成十三年十一月、密教文化研究所が聖教文書調査を実施することで合意、同十四年四月から研究所で継続的な調査を開始したものである。

### 2、親王院所蔵の聖教文書

高野山親王院には上蔵に二百四十七箱、堯栄文庫に四十箱程度の聖教が所蔵されている。上蔵については先住中川善教師の手にな

る『親王院聖教目録』十冊があるが、収められた箱ごとの書名と数量程度の所在記録であり、調査が進むにつれ誤記や遺漏のあることが分かり、一部には現状と相違を来していることが判明した。堯栄文庫については当初から目録自体が完備しないため、全体の範囲が既に分からない状態である。

親王院所蔵の聖教は大半が江戸時代の写本・刊本であり、全体の分量から言えば室町以前の古写本・古刊本は少ない。しかし、江戸中期から明治にいたるまで、宝性院門主や正智院の住職が兼務していた例があり、それらから移されたと思われる聖教の中には、多くの転写の原本となった古写本が含まれている。文書についてもほとんどは江戸時代のものであるが、中には慶長九年（一六〇四）応其の大門二王供養願文（第一八七箱）や、御影堂に収蔵されていた『宝簡集』の写し（特二箱）等、興味深いものも散見する。

また、親王院の聖教自体、ごく限られた個人的な申請以外には閲覧に応じたことがなく、昭和50年代の高野山文化財保存会と密教文化研究所合同の山内寺院調査の際も手がつけられていない。また、堯栄文庫の聖教は元座主水原堯栄師が購入・収集したものであり、この中には印融（一四三五―一五一九）自筆の『十住心論』十帖（『定本弘法大師全集』収録本の底本）や東寺の杲宝（一三〇六―一三六二）書写の『護摩抄』等、真に貴重な典籍が含まれている。

現存状況について言えば、上蔵収蔵分は親王院で本来所蔵していたものの他、兼務寺となっている如意輪寺や五智院より移納されたもの、それ以外から持ち込まれたらしい聖教箱が見られ、全体的に厳密な分類・整理がなされておらず、聖教と文書の混在する箱も多い。最終的には内容に応じた分類・収納を図る必要がある。

### 3、現在の進捗状況

調査を進めるにつれ、同院の『親王院聖教目録』の誤まりの外に、既に目録どおりには収納されていないことが分かった。これは目録作成時の記載漏れの他、返収納時の戻すべき箱の間違いが大半である。そのため、作業方法としては目録を元にした実物との有

無照合を行い、目録記載のものとそれ以外とを分けて調査した上、将来は全体的に再分類することを目指して現状のまま保存することとした。平成十四年十二月時点では上蔵の聖教・文書約六十箱が調査済みで、鎌倉から江戸初期頃の写本や古文書六十五点約四千コマを撮影している。

貴重な資料については今後、『密教文化研究所紀要』や親王院堯栄文庫編『堯栄文庫研究紀要』誌上で公開できればと考えている。試みに、正智院道範入滅の記録を紹介してその手始めとしたい。

### 【資料紹介】

道範日課臨終秘儀 一冊 文政十三年(一八三〇)写(特二箱)

楮半紙二つ折りの袋綴じ、紙縫りで二ヶ所を大和綴じにする。表紙も共紙で、全七丁。縦二四・一センチ、横一八センチ。本文は半丁に十行、一行の字数十五六字。巻末に「此小卷子者余偶搜於正智院丈室古書箱中得之仍卒爾写焉、文政十三寅春閏三月四日、竜花主人道猷記」の書写奥書がある。

表紙左上寄りの墨書外題は先のようにあるが、本文首行には細字で「表云」、その下に「道範之行状」とあるので、恐らく外題は書写人道猷の付けたもので、原本の外題は「道範之行状」であったと考えられる。道猷(一七九六―一八五三)は正智院の一代で、『紀伊統風土記』の「高野山之部学侶方」の編纂に関わったことで有名であり、その必要からか、自写の典籍類は少なくない。後に触れるが、本書に関しては『紀伊統風土記』に参照されていることが明確である。奥書から本書の原本が正智院所蔵であったことが知られるが、昭和五十八―五十九年に高野山文化財保存会が行った調査カードの中には見付けられなかった。その意味では、書写年代に関わらず、親王院写本は貴重な一本と言えよう。『国書総目録』にも見えない。

本書は鎌倉前期における高野山教学、否当時の全真言宗に大きな影響を与えた正智院道範の入滅時の記録である。本文の最末には「于時建長四年（壬子）七月一日弟子良昭（在判）」とあるから、建長四年（一二五二）良昭記であることが分かる。良昭はその前の文に道範の「年来祇候給仕弟子」と言っているが、道範が中院流伝法灌頂を授けた十一人の中にはなく（『統真言宗全書』二五「血脈中院」、二四〇～二四一頁参照）、『金剛峯寺析負輯』（『同全書』三十四・三十五）にも検出できず、その伝歴は詳らかでない。道範自身の伝歴にも実際には未だ不明な点があり、詳細は博く資料を漁獵して究明する必要がある。その生涯を略述することもここでは差し控えるが、一例を挙げると、道範入滅の年齢に既に異伝の存在することである。『同風土記』「高野山之部」卷十「高僧行状」の正智院道範伝には入滅を「年七十四」とした上で、「名徳伝及び宝光院譜六十九とす、正智院譜七十五とす、然るに範師臨終の日、門弟親たり記する所の秘記を見るに七十四とす、今これに拠る」と注している（『統真言宗全書』三十九、二四頁）。ここに云う門弟の秘記が本書を指すことは疑いないが、本書には道範入滅時の年齢を明記してはいない。これは文中にある道範の奥書の写しに、建保三年（一二二五）生年三十七とあることから建長四年（一二五二）七十四歳の没年齢を算出したものである。この点、なお検討を要するのは言うまでもないが、『密教大辞典』『密教辞典』共に七十五歳寂としているのを定説とはできない。又、正智院道猷が風土記起草に当たり、このような小品にまで注意をはらって参照している態度が改めて明瞭となり、その人となりを髣髴させる一事と言えよう。

本書の内容について、特に気がついた点を簡単に紹介すれば、次の四点を挙げたい。

(1) 大師宝号

現在、御宝号として一般に「南無大師遍照金剛」と唱える例は、道範の『秘密念仏抄』（『大日本仏教全書』真言部にあり）にあるのが最も古いと嘗て大山公淳先生より承った。確かに同書下巻「尋常行儀事」に、偈頌の形ではあるが、「南無大師、遍照金剛、普賢行願、皆令満足、我今一心、発願廻向」等の祈願文を記し、次の「臨終用心事」にも「南無大師遍照金剛、哀愍加持、往生極楽」等の文を大師の御影に向かって啓白発願することを説いている。同書にも本書と同じく「宝号」の語を見るから、道範は日常、意識的にこれらを唱えていたものらしい。

## (2) 念仏

丑の時(午前一〜三時頃)の休息前に衣・袈裟を脱いで三帰と念仏十遍を唱えたと云う。念仏十遍というのは『観無量寿経』に説く十念に拠るものであるが、『秘密念仏抄』上の「十念事」には、「秘藏記に云わく」として、密教では十念成就すとは十波羅蜜を円満する義であるとしている。道範の念仏説は、禅林寺静遍から相伝したとされているそれを、密教的解釈によって再構成したものであることが『秘密念仏抄』全篇から知られる。今の書に、入滅時の本尊として阿弥陀ではなく大師の御影のみを懸け、別の本尊や荘厳は必要ないと言っていることは、全く『秘密念仏抄』下「臨終用心事」の自説に従ったものである。

## (3) 三点説

これも静遍から相伝したと云われている教義であるが、道範の撰述には随所に現われる、主要な解釈法と云ってよい。しかし、本書では釈迦の頭北面西の入滅相に拠らず、道範が頭南面東で入滅した意義について三点説を用いているのであるから、恐らく浸透していた教義に従って弟子達が解釈したものであろう。

## (4) 阿息観、又は阿吽合観

道範は阿字観や出入の息にア字とウン字を観ずる観法についても著述を残している。著名なものは『道範消息』又は『正智院御消息』と呼ばれるもので、延宝六年(一六七八)に開版された(『日本古典文学体系』八十三・仮名法語集にあり)。他にも道範の名を冠する小編がいくつかあつて多くは真偽未詳であるが、親王院第五十二箱には『アウン(※原梵字)合観(首竹)』(江戸初期写)と題する書が残されている。これは四字一句の頌文で出入の息にア字とウン字を観ずる秘決を記したもので、「建長三閏九月二十一日 注進禅定殿下 阿闍梨道範」の奥書がある。その次に「書本云、先師道範同年四月(壬子)五月二十二日戌時、住瑜伽字観入滅了、可思合々々々」とあつて、今の臨終儀に直接関連することが窺える。道範が日常阿吽合観を行っていたことは疑いがないようであるから、阿字観等に關する撰述に道範記と称するもののある理由が窺えよう。

以上から知り得る所は、道範の臨終行儀は要するに真言僧としての道範自身の教義や日常の実践がそのまま現われていて、いわば

生涯を集約したものとと言えるのではなからうか。ところで、以前紹介した意教上人頼賢（二一九六～二二七三）にも門弟の手になる御臨終記が残されている（『密教文化研究所紀要』十二参照）。他に明恵上人（二一七三～二二三三）や叡尊（二二〇二～二二九〇）にも臨終記・遷化記のあることが知られている。高僧入滅時の記録を残す習慣が鎌倉時代にあったように思われるが、後世の僧伝等に現われない、当時の生の資料として貴重なものであることは言うまでもない。

以下に本文を紹介するが、原文は行取り・文字遣い等、必ずしも原本のままではなく、漢字は多く常用の文字に改めている。カナ・返り点も原文には不足が多いが、補入は一部に留め、文中の誤字と共に後ろの読み下し文に反映させることとした。なお〔※〕は編者の注記を表わしている。訓み下し文中の丸括弧（ ）内は原文の細字、梵字は片カナで表わした。

末筆ながら、翻刻の許諾をいただいた親王院現住安田弘仁師に御礼申し上げます。

【原文】

『道範日課臨終秘儀』〔※表紙外題〕

表云 道範之形状

正智院先師道一毎日御所作日記

一晨朝後御勤事 先手口洗<sup>テ</sup>后向<sup>レ</sup>東 大巾 理趣經一卷読誦之其ノ間三十七尊種子ヲ御手面ニ指<sup>ラ</sup>以<sup>テ</sup>

令<sup>レ</sup>書給其ノ後向<sup>レ</sup>南 大明神 心經等読誦之 念誦等有<sup>レ</sup>之 云 口 云 云

一至道場行法事 阿弥陀護摩一座 并 愛染王行法一座 舍利法故合行敷 大師御前<sup>ニテ</sup>花一膳供ニ養之一理趣

經一卷尊勝陀羅尼七遍大師宝〔※傍注、「漢イ」〕号大明神宝号念誦也 云 口 云 云

一御自行之率都婆尺奥<sup>ニ</sup>云建保三年 乙亥 五月一日率都婆二本五字真言光明真言始〔※如か〕斯

同年八月二日率都婆二本五字真言阿弥陀三尊種子書写之 生年三十七

上 病者<sup>ニ</sup>書<sup>レ</sup> 病者<sup>ニ</sup>書<sup>レ</sup>

アキハナシ

テリシカキナシ アキハナシ アキハナシ アキハナシ アキハナシ アキハナシ アキハナシ アキハナシ

已上三本

上 行 了 了 行 下 可 不 可 了 可 能

上 可 不 能 行 下 行 行 行 行 行 行

已上二本

右梵字者先師御存日之日所作御樣也

理護廣故修之又<sub>云</sub>自身等觀有之又不斷念誦行住坐臥有<sub>レ</sub>之但宗大事理觀諸尊念誦等<sub>ハ</sub>不及注之事相故<sub>云</sub>

一行住坐臥念誦之時右手取念誦〔※珠か〕クリ左<sub>ニハ</sub>指<sub>ヲ</sub>以テ取<sub>レ</sub>数<sub>ヲ</sub>□〔※如か〕是甚深事相大事也 最秘々々一夜御有様事

丑時マテ珠数袈裟衣<sub>ヲ</sub>着<sub>シテ</sub> 御念誦丑時<sub>ニ</sub>至テ衣袈裟脱<sub>テ</sub> 休息但帶<sub>ヲ</sub>ハ不<sub>レ</sub>解<sub>云</sub> 觀念等有<sub>レ</sub>之歟<sub>ト</sub> 覺<sub>ユ</sub> 聞<sub>ユル</sub> 程<sub>ニ</sub> 三歸 并 念仏十遍有<sub>レ</sub>之

一御病中事

違例<sub>ハ</sub> 癰瘡也 以都鄙醫師<sub>一</sub> 療治尽<sub>レ</sub> 忠此<sub>レ</sub> 非<sub>ニ</sub> 強<sub>チニ</sub> 延寿之計<sub>一</sub> 為<sub>ニ</sub> 臨終正念<sub>一</sub> 也 終<sub>ニ</sub> 病中無<sub>ニ</sub> 苦痛<sub>一</sub> 故<sub>ニ</sub> 觀法觀念等不怠不断<sub>ニ</sub> 密觀解有<sub>レ</sub>之<sub>云</sub>

一有御第〔※まま〕子潜勸申云病中ノ作法臨終之儀式如何可用意仕候乎 仰云別子細心ナシ<sub>云</sub> 重申



云宗ノ大事ト申候ハ、臨終ニコソ候得者先如レ常本尊香華等用意候ワニコソ宜候ヌ 仰云常途之作法無  
詮言候本尊ハ大師御影所勞ノ自レ始奉レ懸候得者其ノ外ニ別ノ本尊不レ候ワ又臨終之莊嚴モ不可有事  
也云云

又重申云年来ノ御所存ハ被思食出候歟又何事カ御心ニ被レ懸思食候一期ノ大事ト申候ハ生死ノ折角計ノ  
事ニコソ候ヘ 仰云年来心ニ懸思候事ヲ<sup>イ</sup>字計也云云

被レ勸申人云悦入候々々々已上重々問答親<sup>タリ</sup>良昭 承レ之候云云

一看病弟子等申云臨終之時看病者ハ如何ナル真言ヲ唱ヘ又常ニハ臨終ニハ病者ニ印ヲ結バセマイラスルコト  
候左様ニモ可レ候歟云何トニモカクニモヲフセ置セ可レ給云（※矣か） 仰云印ハ当時モ内外縛等印ヲ

結フ所詮此ニ印計也此ノ印ヲ以テ<sup>テ</sup>瓦等ニ明ヲ誦スル此レ宗大事即身成仏ノ印明也但此等印明等モ臨終之  
時ハ一切誦結申コト不レ可レ有任普通之儀印結スルコト不可有努力々々穴賢々々 又臨終之時勤ニハ面々

五字真言大師宝号ヲ可レ唱此外之勤不可有之其ノ故ハ五字真言大師漢号尤甚深習有レ之云云 最秘々々  
重申云釈迦ハ頭北面西右脇臥也此ノ御事ヲハ如彼尺迦可レ仕候歟如何 仰云我所存ハ兼日ニ如レ彼方所ヲ

定事努力不可有也云云 依ニ如レ此御遺言一方所ヲ改メマイラスル事ナシ然間自頭南面東右脇臥也然今自  
宗之意以ニ中東南ノ三方ヲ為ニ自証之三部三点一之時頭南ハ自証満位三点之中ニハ事点三部ノ中ニハ仏部理

智人ノ中<sup>ニハ</sup>人也彼釈迦頭北面西之御入滅西方ノ方便<sup>ニ</sup>出<sup>ル</sup>ラ即云<sup>ニ</sup>無量寿<sup>一</sup>是也故大日經疏云以衆生界無尽故亦無尽〔※終か〕尽故名無量寿 文 此意ハ頭北面西方便撰化之表示也今聖靈頭南面西〔※東か〕之入滅ハ是自証円極之表示也莫<sup>レ</sup>疑之穴賢々々

一御食事止御シ申

五月廿一日戌時半御粥三口 良昭奉勸之 之後不通同廿二日巳時手口洗御<sup>シテ</sup> 日来御所存大事等印明令結誦給然后已知終<sup>ニ</sup> 絶入手足寒工稍轉<sup>シテ</sup> ヒエナヲリテ申ノヲハリマテハ御分別有<sup>レ</sup>之此ノ間開口<sup>ヲ</sup> 歎之御息ヨハリナラセ給イ戌半計<sup>ニ</sup> 面輪端正<sup>ニシテ</sup> 眼目<sup>ヲ</sup> 閉無相〔※想か〕無念<sup>ニシテ</sup> 入滅此臨終之儀年来ノ御遺言毫利<sup>モ</sup> 不<sup>レ</sup>シテ違自然<sup>ニ</sup> 歎字ノ御入滅也 云 抑終焉開口之<sup>ヲ</sup> 歎ノ息者法身自性之内証最後合脣<sup>ス</sup> 歎ノ息者仏心円満之境界也凡以此ノ御臨終作法<sup>一</sup> 為<sup>ニ</sup> 從凡入仏法之龜鑑<sup>一</sup> 成<sup>ニ</sup> 即事而真之現覺者歟 已上 条々機前<sup>ニハ</sup> 可<sup>レ</sup>信非機前<sup>ニハ</sup> 有<sup>レ</sup>疑努力々々不可披露 云 穴賢々々如<sup>レ</sup>斯子細雖云<sup>ニ</sup> 不能染毫<sup>一</sup> 依為年来祇候給仕之弟子<sup>一</sup> 九牛一毛注記之而已于時建長四年 壬子 七月一日第〔※まま〕子良昭 在判

此小卷子者余偶搜於正智院丈室古書籍中得之仍卒爾写焉

文政十三寅春閏三月四日

竜花主人道猷記

【読み下し文】

『道範日課臨終秘儀』〔※表紙外題〕

(表に云わく) 道範之形状

正智院先師道範〔※原文「道一」〕 毎日御所作日記

一、晨朝の後、御勤のこと 先ず手口を洗つて後、東(大師)に向かい理趣経一卷これを読誦す。その間、三十七尊の種子を御手面に指を以つて書かしめ給う。その後、南(大明神)に向かい心経等これを読誦し、念誦等これありと云云。口に云云。

一、道場に至り行法のこと 阿弥陀護摩一座、並びに愛染王行法一座(舍利法の故に合行か)。大師御前にて花一膳これを供養し、理趣経一卷・尊勝陀羅尼七遍・大師宝〔※傍注「漢イ」〕号・大明神宝号念誦なりと云云。口に云云。

一、御自行〔※或いは「御自作」か〕の率都婆釈の奥に云わく、建保三年(乙亥)五月一日、率都婆三本、五字真言・光明真言、かくの如し〔※原文「始斯」を訂正〕。

同年八月二日、率都婆二本、五字真言・阿弥陀三尊の種子これを書写す。生年三十七。

(上) ケン・カン・ラン・バン・ア ケン・ウン・ラ・ビ・ア

ノウ・シャ・ハ・ラ・ア

オン・アボキヤ・ベイロシヤノウ・マカボダラ・マニ・ハンドマ・ジンバラ・ハラバリタヤ・ウン

已上三本

(上) ケン・ウン・ラ・ビ・ア

(下) バ・ザラ・ダ・ト・バン・キリク

(上) バン・ウン・タラク・キリク・アク

(下) ア・アー・アン・アク・アーク・サ・サク

已上二本

右梵字は先師御存日の日所作御様なり。

理護摩の故にこれを修す。又、ア・ウン自身等の観これあり。又不断念誦、行住坐臥にこれあり。但し宗の大事・理観・諸尊念誦等はこれを注するに及ばず、事相なるが故にと云云。

一、行住坐臥念誦の時、右手に念珠〔※原文「念誦」を訂正〕を取ってくり、左には指を以って数を取る。かくの如く甚深事相の大  
事なり（最秘々々）。

一、夜の御有様のこと

丑の時まで珠数・袈裟衣を着して御念誦、丑の時に至って衣・袈裟を脱いで休息す。但し帯をば解かずと云云。観念等これあるかと覚ゆ。聞ゆる程に三帰並びに念仏十遍これあり。

一、御病中のこと

違例は癰瘡なり。都鄙の医師を以って療治忠を尽す。これ強ちに延寿の計らいに非ず、臨終正念のためなり。終に病中苦痛なきが故に、観法観念等不怠不断に三密の観解これありと云云。

一、御弟子〔※原文「弟子」を訂正〕あつて潜かに勧め申して云さく、病中の作法、臨終の儀式、如何に用意仕るべく候や。仰せに云わく、別に子細の心なしと云云。重ねて申して云さく、宗の大事と申し候は〔※原文「は、」〕臨終にこそ候得ば、先ず常の如く本尊・香華等、用意し候わんこそ宜し候いぬ。仰せに云わく、常途の作法詮言なく候。本尊は大師御影、所労の始めより懸け奉り候得ば、その外に別の本尊候わず、又臨終の莊嚴もあるべからざることなりと云云。

又重ねて申して云さく、年来の御所存は思食し出され候か。又、何事か御心に懸けられ思食し候、一期の大事と申し候は生死の折角計りのことにこそ候え。仰せに云わく、年来心に懸け思ひ候ことはア・ウン・バン字計りなりと云云。

勧め申さる人云わく、悦び入り候、悦び入り候。已上重々の問答、親たり（良昭）これを承り候と云云。

一、看病の弟子ら申して云さく、臨終の時、看病者は如何なる真言を唱え、又常には臨終には病者に印を結ばせまいらすること候。

左様にも候べきか、云何。とにもかくにもおおせ置かせ給うべし〔※原文「可給云」を「可給矣」の誤写と読む〕。仰せに云わく、印は当ても内外縛等の印を結ぶ。所詮、この二印計りなり。この印を以つてア等の三明を誦ずる、これ宗の大事、即身成仏の印明なり。但しこれらの印明等も臨終の時は一切誦結し申すことあるべからず。普通の儀に任せて印結することあるべからず。努力々々、穴賢々々。又、臨終の時の勤には、面々五字真言・大師宝号を唱うべし。この外の勤これあるべからず。その故は、五字真言・大師漢号、尤も甚深の習これありと云云。最秘々々。

重ねて申して云わく、釈迦は頭北面西右脇臥なり。この御ことをばかの釈迦の如く仕るべく候か、如何。仰せに云わく、我が所存は兼日にかの如く方所を定むること努力あるべからざるなりと云云。かくの如くの御遺言に依つて、方所を改めまいらすることなし。然る間、自ら頭南面東右脇臥なり。然るに今自宗の意、中東南の三方を以つて自証の三部三点とするの時、頭南は自証満位三点の中には事点、三部の中には仏部、理智人の中には人なり。かの釈迦の頭北面西の御入滅は、西方の方便に出るを即ち無量寿と云うこれなり。故に大日経疏に云わく、衆生界無尽なるを以つての故に、亦終尽〔※原文「尽尽」を訂正〕することなし、故に無量寿と名づくといえり。この意は、頭北面西は方便摂化の表示なり。今聖靈、頭南面東〔※原文「面西」を訂正〕の入滅はこれ自証円極の表示なり。これを疑うこと莫れ、穴賢々々。

一、御食事止み御し申す

五月二十一日戌の時半、御粥三口(良昭これを勧め奉る)の後通ぜず。同二十一日巳の時、手口洗い御して日来御所存の大事等、印明結誦せしめ給う。然る後、已に知んぬ、終に絶え入り手足寒え、稍転じて寒え治りて〔※原文「ひえなおりて」〕、申のおわりまでは御分別これあり。この間、開口ア・アーの御息弱り〔※原文「よわり」〕ならせ給い、戌の半計りに面輪端正にして眼目を閉じ、無想〔※原文「無相」を訂正〕無念にして入滅す。この臨終の儀、年来の御遺言毫利も違せずして、自然にア字の御入滅なりと云云。抑も終焉開口のア・アーの息は法身自性の内証、最後合唇のウン・ウンの息は仏心円満の境界なり。凡そこの御臨終の作法を以つて従凡入仏法の龜鑑とし、即事而真の現覚を成ずるものか。(已上)条々、機前には信ずべし、非機前には疑あり、努力々々

披露あるべからずと云云。穴賢々々。かくの如くの子細、染毫すること能わずと云うと雖も、年来祇候給仕の弟子たるに依つて九牛の一毛、これを注記するのみ。

時に建長四年(壬子)七月一日、弟子〔※「弟子」を訂正〕良昭(在判)

〔※奥書〕

この小卷子は、余偶たま正智院丈室の古書箱を捜す中にこれを得、仍つて卒爾にこれを写す。

文政十三寅春閏三月四日、竜花主人道猷記

(以上)

〈キーワード〉

親王院、聖教、文書、道範、臨終記